
犬になったぼく

鱗岩 忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬になったぼく

【Nコード】

N0074Z

【作者名】

鱗岩 忍

【あらすじ】

ある日、ぼくは学校でひろった子犬と、心が入れ替わってしまう。動物が大嫌いなママは、ぼくを家から追い出すが……。

1 犬になったぼく（前書き）

この物語はフィクションですが、真実を描いています。

1 犬になったぼく

1 犬になったぼく

ぼくはタロウ。

でも、なぜだか分からないけど、ジロウになっちゃってるみたいなんだ。

わけが分からないって？

ぼくにだって、まったくわけが分からない。

自分自身の頭のなかを整理するためにも、順を追って考えてみよう。まず、ぼくは小学三年生だ。

ごくふつうの町のごくふつうの小学生。

人より体が小さくて、列をつくって並ぶときには、いつも一番先頭に立つ。

クラスでは、いきもの係をやっている。

ふつう、係は入れ替わるものなんだけど、ぼくの場合はずっといきもの係だ。

学校では九官鳥を飼っている。

それからうさぎも。

にわとりも。

亀も飼っている。

ぼくはそういった小動物が大好きだ。

犬も好きだし、猫も好き。

でも、ママはぼくと正反対。

動物が大嫌いなんだ。

ぼくはうちでも犬を飼いたいと思っているが、ママが反対するからダメだ。

パパはぼくと同じ意見なんだけどね。

将来は獣医かペットショップの店員になりたい。
だから、いきものは将来のための勉強でもある。
学校の勉強は苦手だけど、こういう勉強なら全然苦にならない。

ある日の放課後、ぼくはうさぎ小屋の裏で一匹の子犬をみつけた。

まだよちよち歩きが抜けない小さな柴犬だった。
痩せて、ひどく汚れていた。

たぶん、学校の周りを流れるどぶ川に落ちたんだと思う。
抱いてみると、ちよっと臭った。

でも、ぼくには可愛くて仕方がなかった。

そこで、深く考えもせずに、家に連れてきてしまったんだ。

ママに見つかれば、捨ててこいと言われるだろう。

だから、ぼくはぼくの部屋に隠して飼おうと決めた。

ぼくは、この犬をジロウと名付けた。

ぼくがタロウだから、ジロウはぼくの弟分だ。

ジロウを見つけたときに、給食の残りのパンをあげたので、エサは
まだやらなくていい。

だから、次にやるべきことは、ジロウを洗ってやることだ。

ママは、台所で夕飯の支度中だから、風呂場に近づくのは容易だった。

夕べの残り湯を洗面器にたっぷり入れて、ぼくは2階の部屋に向かった。

部屋ではジロウが隅の方で震えていた。
かわいそうに。

早くきれいにしてあげて、タオルにでもくるんであげなければ。
そう思って、ジロウを洗面器に入れた途端、世界が変わった。
少しめまいがして、目を閉じた。

次の瞬間、洗面器のなかに入っているのは、ぼくの方だった。

目の前には、ぼく自身が笑ってこつちを見ている。
天然パーマ。

度の強い眼鏡。

しもぶくれの顔。

生まれたときからおなじみのぼくの顔がそこにあった。
向かい側のぼくは、笑いながらぼくにこう言った。

「うまくいったぞ。今日から君は犬のジロウだ」

とても意地悪な笑顔だった。

ぼくは、すごく恐かった。

その笑顔を悪魔のように感じた。

なによりも、その顔がぼく自身だからもっと恐かった。

その場にいたたまれなくなって、洗面器を飛び出すと、半開きのドアに体当たりした。

そして、あわてて階段を下りると、途中から転げて滑り落ちた。

トントントン…。

体が小さかったから、あまり大きな音はしなかった。

でも、ママは物音に気付いて台所から出てきた。

ぼくは夢中になって、ママに駆け寄った。

「ママ、ママ！ 大変だ。部屋に変な奴がいるよ」

ママはぼくを見ると、身を固くして立ち止った。

そして、ママに向かって飛び付いたぼくを、思い切りはねのけた。

「きゃん！」

ぼくはまるで子犬みたいな鳴き声を上げて、廊下に叩きつけられた。骨が折れたかと思った。

それ以上に、ママの行動にショックを受けた。

ママにはぼくが分からないらしい。

玄関先の鏡には、今のぼくの姿が映っている。

そこに映っているのは、まぎれもなくジロウだった。

さっきぼくが洗面器に入れて洗ってあげようとしていたジロウ。

痩せて、泥まみれではあるが、クリクリとした可愛い目と、一回転した愛らしい尻尾を持つ柴犬のジロウだった。

立ち止まって鏡を見つめるぼくに向かって、ママは手許の箒を振り回した。

「ちょっとアンタ、出ていきなさい！」

箒の先が、ぼくの体に当たってチクチクした。

ママは、そうやってぼくを追い出そうとしたが、負けるわけにはいかなかった。

こんな状態で追い出されたら、大変だ。

はらぺこで力が出なかったが、右へ左へ箒をかわして、なんとか耐え抜いた。

しかし、2階から、ゆっくりと“ぼく”が出て来る。

「どうしたの、ママ。その薄汚い犬はなに？」

ママはその声を聞いて、“ぼく”に対してこう言った。

「タロウ、あんたちよっと手伝いなさいよ。この犬を追い出して」

この一言で、ぼくの気持は折れた。

ママにはぼくが分からない。

ママは、偽物の“ぼく”をぼくだと思っている。

そして、二人してぼくを追い出しにかかっている。

この事実を突き付けられたとき、ぼくはされるがままになった。

ママの箒に押され、“ぼく”の足に蹴られて、ぼくは玄関先から外へ転げ出たんだ。

今ぼくは、はっきりと分かった。

ぼくは犬になった。

犬のジロウになっちゃったんだ。

2 隣のチビ

これからどうしよう…。

訳が分からないままに追い出されてしまったぼく。町の表通りをさ迷うが、どう考えても分からない。気になるのは、あのときのジロウの言葉だ。

「うまくいっただぞ」

…ってことは、これは罠だったってことだ。

あんなに可愛い柴犬が、ぼくを罠にはめるなんて。しかし、ただでもあり得ないことが起こってるんだ。常識で割りきれるわけない。

とにかくこれから先どうやって生きてゆくのか。

まずはそれを考えなきゃならない。

そのとき、お腹がグーッと鳴った。

さっき給食の残りのパンを食べたばかりだったけど、焼け石に水だった。

ジロウはどうやらここ数日なにも食べていないようだ。

「お腹が空いたなあ」

思わず口に出したが、実際に流れ出た声は、

「く〜ん、く〜ん」

という子犬の鳴き声だった。

食べ物を探さなくちゃ。

でも、のら犬というのは、どうやって食べ物を見つけるんだろうか。

猫ならずめでもねずみでも捕りそうなものだけど。

第一、動物が好きなぼくが、小鳥なんかを殺せるわけがない。できれば、パンやごはんを食べたいものだ。

そんなことを考えて歩いていると、向こうから知った顔がやってきた。

ぼくの家の隣に住んでいるおばさん。

そこで飼われているヨークシャーテリアのチビだった。

ぼくはずっと犬を飼いたかったから、いつもおばさんがうらやましいと思っていた。

こんなに可愛い犬を飼えたらいいのにな。

いつもそう思っていた。

それで、チビのことは随分と可愛がった。

おばさんがいいと言わないので、食べものをあげることはできなかったけど。

「やあ、チビ。ちょっと相談があるんだけど」

ぼくはチビに近づいていった。

道の向こう側では、八百屋さんが大声で怒鳴っている。

今日は、大根が安いらしい。

おばさんは、八百屋の声に夢中だったから、ぼくがチビに近づいても気がつかない。

チビは、ぼくに気づくと、しかめっ面でこう言った。

「あんた、誰？」

ぼくは絶望的な気持ちになった。

「ぼくだよ。隣のタロウ。分からない？」

「タロウは人間だろ？ あんたは柴犬じゃないか」

「実は今日、柴犬を拾ったんだけど、どういうわけか心が入れ替わっちゃったんだ。こんなことって聞いたことある？」

「あるよ。知らないの？ ケケケ…」

チビは、意地わるそうに笑って言った。

「どういうこと？ よくあることなの？」

チビは、怪訝そうな顔をして、

「本当に知らないのか。…ってことは、お前は本当にタロウなんだな！」

「だから、そうだって言ってるじゃないか」

ぼくは面倒になって声を荒げた。
実際に出た声は、

「ウー、ワンワンワン！」

という唸り声だったけど。

この声を聞いて、おぼさんがこっちに気付いた。

「まあ、なんででしょう。この汚い犬は。あっちへ行っ
ッ！」

おぼさんは太い足で、ぼくを追っ払おうとした。

チビは何かを知っている。

どうしても聞き出したかったけど、いまは無理そうだった。
お婆さんの足蹴りにはとても敵わなかった。

そのとき、チビが叫んだ。

「知りたかったら、夜、うちに来て！」

それを聞いて安心した。

夜になったら理由が聞ける。

こんな状況に陥った理由。

それまで生きていればの話だけど。

町の人がこっちを見ている。

チビから離れたから、お婆さんの追及からは逃れたけど、
通行人は皆こっちを見ている。

早くここから離れなきゃ。

ひと目につかないように。

もう夕暮れ時だ。

夜までもう少し…。

3 チビが言ったこと

それから、ぼくは学校で待った。

他に、夜まで身を隠す場所を知らなかったからだ。

いきもの係はぼく一人だったから、例のうさぎ小屋に近づく生徒は滅多にいない。

しかも、ここからは、校庭をはさんだ向こう側に、校舎の大時計が見えた。

ぼくは、午後10時を確認し、急いでその場から立ち去った。

まだ少し早いかもしれないが、ぼくがチビの家に着く頃には、家の人はそろそろ眠るころだ。

おぼさんの家には、おぼさんとおじさんしか住んでいなかったから。若い人がいる家なら、もう少し遅くならないと安心できないけどね。チビの家に行く途中、隣のぼくの家の前を通り過ぎた。

ここで今日、ぼくはママに追い出されたんだ。

思い出したらさみしくなった。

いまごろ、ぼくになりすましたジロウは、温かい部屋でおいしい夕食を食べ、お風呂に入ってゆったりとしているに違いない。

それにひきかえぼくは、泥だらけの毛は臭いし、体は疲れているし、はらぺこだった。

こんな不公平なことってあるもんか。

ぼくは果たして、もとの姿に戻るのだろうか。

そんなことを考えているうちに、チビの家に着いた。

チビは座敷犬だから、室内のどこかにいるはずだった。

さて、どうやって話をしたらいいんだろう。

チビの家に着いたのはいいけど、どうしたらよいか分からなくて家のまわりをうろうろしていた。

すると、玄関の方から、押し殺したような低い声がした。

「タロウ？　そこにいるの？」

チビの声だった。

ぼくはうれしくなって、

「うん。いるよ。玄関の前だよ」

と返事した。

チビはあわてて、

「そんな大声出しちゃダメだ。今出て行くから待ってて」

と言い終わらないうちに、外に出てきた。

おぼさんの家の玄関には、犬用のドアがついていた。

ふつうは、夜は鍵がかかってるんだけど、おぼさんはよく忘れるらしい。

「ときどき、こうやって外に出て、夜の散歩をしてるんだ。さあ、近所の公園に行こう」

チビはそう言って、駆けだした。

ぼくもチビに尾いて走った。

4本足で走るのに慣れていなかったたので、尾いていくのが大変だった。

でも、ここで見失ったら、どうにもならない。

ぼくは必死だった。

公園に着くなり、チビとぼくは、ベンチに飛び乗って話し始めた。月明かりがまぶしいくらいに輝いていた。

「ぼくは一体どうなっちゃったの？」

ぼくはチビにそう聞いた。

「どうなっちゃったって、入れ替わったんだろ？ ええーっと、その…なんとかっていう犬…」

「ジロウ」

「そうジロウだ。ジロウと入れ替わったんだね。よくあることだ」

チビは、どうってことないようにそう言った。

まるで、そんなことは別に珍しいことじゃないといった感じ。

「そんな話始めて聞いたよ。犬と人間の心が入れ替わったんだよ」

「そりゃ、入れ替わるにはいくつかの条件があるし、入れ替わった犬の方だって、もとは戻りたくないから、絶対に条件が合わないように気をつけるからさ。もとは戻った人間がいなければ、この秘密は公にされることはない。そうだろう？」

「そんな…」

ぼくは絶望的な気分になった。

チビに言わせると、こんなことは世界中で頻繁に起こっていることらしい。

ただ、一旦犬になって、元に戻った人間がいらないから、この秘密は秘密のまま守られているというのだ。

もう何百年も前からそうだったらしい。

「だって、犬にとっちゃ、この世界はまったくやりきれないぜ」

「どうしてさ。チビなんて、おばさんに可愛がられているじゃないか」

「まあ、俺なんかまだいい方だね。それにしたって、いい歳して尻尾振ってご主人さまに媚を売らなきゃ食べていけないんだ。これはこれでなかなかつらいものがあるぜ。もっとも、この芸ができなきゃ、捨てられて保健所行きだけだな」

「保健所？」

「そうさ。保健所で殺されるんだ。噂によると、保健所じゃ、集めた犬をまとめてガス室に送るらしいぜ。昔は、人間同士でもそんなことやってた国があったそうだけだな」

「それで、その条件ってなんなのさ。犬と人間の心が入れ替わる条件って…」

確かあのとき、ぼくは洗面器でジロウを洗おうとしていた。

ジロウを両手で抱きあげて、ゆっくりと洗面器に入れ、改めてジロウの目を見たんだ。

次の瞬間、少しめまいがして、気がつくともぼくの方が洗面器に入っていた。

あの動作のどこが条件に合っていたんだろう。

「そうだなあ。水と太陽と動作、それから目を合わせることもなんかが関係あるらしい」

「あるらしい？ チビは条件がどんなものだか知らないの？」

チビはうんざりしたように首を横に振りながら言った。

「それが分かっていたら、俺だって人間と入れ替わるさ」

水と太陽と動作、それに目を合わせることに。

今の季節で、午後6時頃のぼくの部屋に入る日差しが、ちょうどいい具合だったんだろうか。

その他に条件はあるんだろうか。

事前に給食のパンを食べておくことなんかもあるんだろうか。限りなく不安になってきた。

元に戻る可能性は、ゼロに近いんじゃないだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0074z/>

犬になったぼく

2011年12月2日15時56分発行